

2B-97
No 10883



修身教育断目錄

- 獵人と漁夫の話
- 友男女子よ教示する話
- 鯨と盟をさす話
- 華園白玉餅を羨む話
- 姉妹の處女の話
- 二個の風鈴の話
- 銘酒空壇の話
- 鹿恩を忘れて殺さるゝ話
- 運の神の話
- 剛愎は危難に臨と分る話
- 危急を助は論及ぬ話
- 虎と他の獸と狩り出た話
- 些少の恩も忘べからざる話
- 鹿と海との話
- 狼野羊を欺す話
- 禽鳥大議論の話
- 蝶々大象の頭に止る話
- 狼虚言を知らざる話
- 農夫時計を失なる話
- 獅々王息の臭を問ふ話
- 栗鼠虫の美聲を感ぜ話
- 驢馬の失錯の話

目錄終

小學 修身教育 第一編

○獵人と漁人の話

一日獵人が兎や鳥を獲て山から飯來途中で。豫て知己の漁夫が種々の魚を籃に入れて荷ひ家に急ぎ行ふ遇て互に會釋しそ並び歩む中獵人は魚を喰度思ひ漁夫は鳥獸が喰たく思へば協議して双方獲を交易たり。而して夫より日々。而人は食料を取換て食たるが初め珍敷互に滋味思ひ。口に價て又自分の獲ものが食たく成し。

二

兒童よ食物に限らるる兎角他の物は如美見へるが。馴ると何も變た事はあゝるのせやぞ。

○虎と他の獸と狩に出た話

虎と他の畜獸と一日狩にいで、兎一疋を得たり。虎是を三に引裂て他の獸に云に。拙者の獸長の事成れば官資として先一個拙者取べ。其次は拙者狩に加はれば。自身の所得として又一個取べし。殘る一個は誰か共。余言を肯する者是を取べしと云たり。

(兒童よ威勢の盛ん成者には。我意の舉動多きものぞ知れよ)

○父男女子に教示するの話

或人男兒と女兒と二人を持。其長男を優太郎と呼。頗る美。次女を阿不美と云て。貌醜。一日優太郎鏡を對ひ己が容貌の美しきを見て。頻り誇り。傍に在。女弟の醜面を誹り笑ふ。阿不美憤り歎き。果は同胞争論を。共に父の膝下にかけて來て。父君。阿兄が鏡を見て。妾の貌を彼此と悪く云。



四 其其様に争論まじ。友愛して遊ぶが善。優太郎よ。汝は以來鏡に對たれば。何ぞ悪い行狀が有て。其清潔き貌を汚は。不爲歎。絶せ。心を付べし。又みは鏡に對たなら。なんでも婦人の徳行を磨き。上て。其容貌の醜さを償は。んと。絶せ。心を用ふるが善。必。二人共此言を忘るま。と戒めたり。

(兒童よ人は容貌の美しさより。心の美しくして才藝あるが善ものぞ)

○些少の思も忘るべからざる話

七月頃の酷熱日。旅客か二三名山徑を登行に。折柄正午時に。暑氣。堪かね。路傍に大樹の有けるを見て。各自其樹下に

五
 馳つきて○腰を下て休み○汗を巾
 ひ風を受たり○稍えて一人其樹の
 梢の方を見て「此樹の楓で有が
 大變太く成た者よ○併人間の爲に
 は不用の雑木なり」と云ば他の者
 も見上て種々と悪く云ば○楓の木
 勿々怒憤の聲を發して「汝等は
 今我の厚庇を被つて暑を凌ぐよ○
 不用の大木杯と誹ふる○此思しら



六
 (兒童よ此の恩儀も忘るべからざ)

○獅子鯨と盟ひをなす話

或海邊に獅々來りて○水の上に浮み出る鯨を見て○獅々の云
 には「鯨公よ自今同盟を爲ましやう○我は陸よすむ獸の王じ
 や○足下は水にすむ獸の長じや○何と好友では無敷○相應た
 同盟で有ん」と云を聞て鯨は直に同意したり○其後不日獅々
 と虎との間に戦争が發りければ○獅々同盟の譯を以て○鯨に
 助力を頼めば○鯨諾して○直に準備をなし○海岸近く出陣の
 なせ共陸に上る事できぬ故○海中より有て氣をもんで居ると○
 獅子是を見て發憤て○我を欺したなど大に罵詈げれば○鯨は

答へるに。決して欺せしに非ざ。我は海中には強勢なれど。陸の援け爲難しと云り。

(朋友を撰むに。よく考へねば成ぬものぞ)

○鹿と海との話

或山にすむ鹿が海を見るに。多人數乗込だ帆船が大波に揺られて危険体なれば。シ「噫海はなさけない者じや。上を航る人をば悉皆損させて仕舞のじや」と云を海が聞いて。優さ婦人の聲にて。ウ「モシ汝妾をわるくはいひ成さります。妾は何も暴動ぎを爲様な者じや有ませぬが。兎角風が来て妾を七さわがせまして。休ませぬので御座ります。風の去た後で妾

への上を舐て。ごらん成さう成ば。極たいらで。汝が平日歩ある陸と同じ様で有ますと云。

(兒童よ柔和な人でも悪人に鼓舞られ居る時は暴動を爲ものじや。夫じやによつて。意地を付られぬ。用心をしなさい)

○申團粉白玉餅を羨む話

竹串に貫れ焼れたるのみたらし粉



團だんが○水みづに冷ひやたる白玉餅しらたまもち(かんだぶし)を見て○羨うらやまみて云いふ○
 ク「白玉君しらたまさん○おまへは水みづの中なかに居ゐて無な涼りやうく有ありませう○私わたしは
 暑あつ時候じこに火ひの上うへにおかれて○暑あつくて○困こまりますよと云いふ
 を白玉餅しらたまもちが聞きてシ「夫それはお困こまりで有ありませう○餅もち私わたしも今は
 冷ひや水みづの中なかに涼ひやしく暮くして○暑あつく有ありませんが○斯いなる迄までに熱あつ湯ゆを
 くぐつて來きました○

(兒童こどもよ方いま今いまゆたかに暮くし樂たのしむ人ひとも○苦くる敷しことむ堪こらへ
 勉つとめて○後のちに安あん樂らくの身みと成なりし者ものぞ)

○狼おほいぬが野羊やぎを欺たます話はなし

九あひ一日いちにちおはかみかみが獸けものを捕と食くはんと山徑やまみちを徘徊うろつくよ○絕壁はげの上端うへは

十じゅうに野羊やぎが草くさを食はんで居ゐるを見みつけ
 たり○然されど勿なほ々く登のぼり難がたければ狼おほいぬは
 野羊やぎに對むかひてオ「其その様やうが高たかい所ところへ
 登のぼつて○若足もしあしをすべいらせては○大變たいへん
 じやから下したへ降おりて來きませう○此所こゝ
 に甘あまひ草くさがたんと有ありよ」と云いふと
 野羊やぎが「ヤこゝ、此所こゝに甘あまひ草くさが有あり
 す○君あなたが御呼おほい下くださるは○僕わたしへの饗ち
 應まの爲ためでは無なく○君あなたへの美食ごちそうの爲ため
 有ありますから」と云いたり○



(兒童よ甘ひ言を付云て近んと爲るのは。能かんがいて用心すべし)

○老父と姉妹の處女の話

或老父兩人の處女を持たるが。同時に良縁ありて。姉を植木屋へ嫁け。又女弟を瓦工へ嫁らせたり。而して二三日過て老父は姉妹の處女を訊問んと。先姉の方に行て。家内の容体は如何なと問ば。姉娘が「御苦心下されますな。誠よよろまいた内。御座ります。我家の産業の種々の願事が御座ります。其中でも肝心の願は。植木の爲に成様な膏雨が。たんと降す。す様に。どの事でも御座ります」と云ふ。老父は。是を聞。安心をま

二十

て又女弟の方へ行て。如何様な挨拶かと聞ば。女弟ひすめが謂るに。「家内人々も宜く居合もよう御座ります。苦心して下さるな。然と一ツ願か御座ります」と云ふ。老父の不審何の願ぞと云ば。「妾は絶と外に苦勞は有ません。か。快晴かつ。さ。大陽がやけつく様におてらし成されて瓦が。能乾上やう。どの願ばかりで御座ります」と云。老父は困りはて、オ「噫、汝は快晴を願ひ。姉は膏雨を願ふ。此はどちらを願ふぞ」と老父の當惑せり。

二十

(兒童よ各自の勝手な事而已云へば。毎度中にたつ人が困りますよ)

○禽鳥大議論の話

一時禽鳥の集り會議を爲に○議場
於て雁が大議論を發して○ガ「何
でも世の中貴賤大小と無○禽鳥の
權利か一樣でなければ成らぬ○夫
か天下の公法じやと」云と○鷲も
鳥も然りと云○大鷲は一喝大聲發
さて○ワ「雁公○何も御尤の發言で
有か○各位の拙者の様な舌や爪を

三十
時

四十

○二個の風鈴の話

或家の軒端に青銅の風鈴と○玻璃の風鈴と○少し間を隔て懸
たり○青銅の風鈴が玻璃の風鈴よ聲をかけて カ「玻璃さんの
今日は風か無て御互に閑暇なから些僕の側へ御出なさい○
何か談柄でも致ませふと」深切らしく云ば○ハ「銅さん夫の
有難えかし僕は君の側へは参りませう○ガ「おせく御出
にくる御坐りますなら君の方へ出かけませうか」と云へ
ば○玻璃は彌々恐れ ハ「斯した儘で談柄を致ませうせう○君が
側へ寄つた時○風か吹出して○鈴然と打合たら○僕は直に破

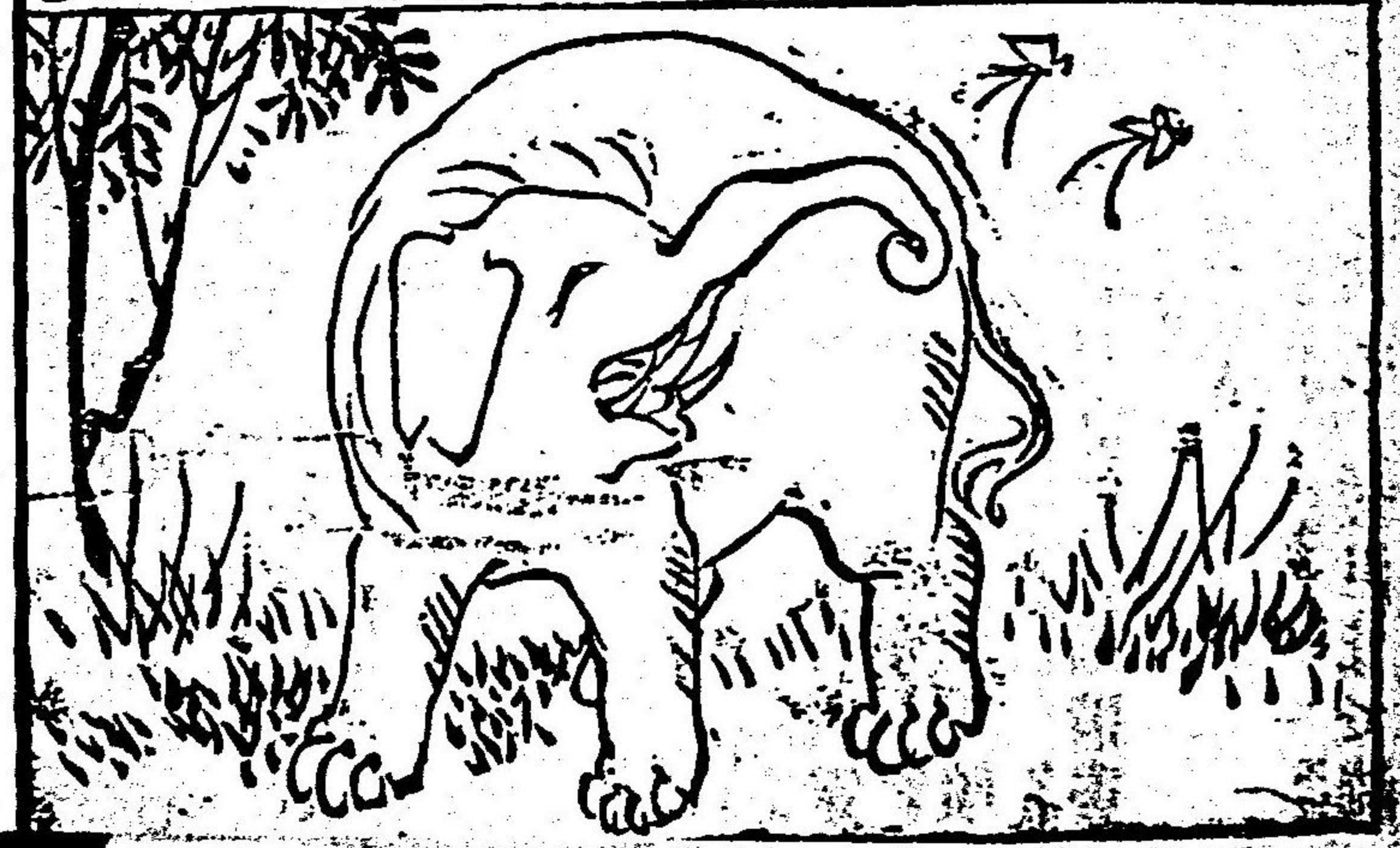


十六 滅仕ます。

（兒童よ強勢を人と交際には注意よ何かめめが出来たら大變な事になるぞ。

○蝶々大象の頭に止し話

五十 小さな蝶が大象の居る側を飛めぐりて象の頭の上に些と止つて憩テ「大象君眞平御免なさい。少時休ましたら直と立去ます。若わたくししか止つて重くて御迷惑なら



「仰下され」と云ば「何も汝が止つたとして。僕は重有ません。何時迄御止なさらう共。直に御去なさらう共。御勝手に成るがよい。僕は汝が何處に御坐るか些も知れませぬ。」

（兒童よ心の小さい者の考へも又小さいもので有ぞ）

○銘酒の空酒場の話

或骨董舖に銘酒の空場を出し有しか。其馨散じけるを其家に來りし者。よき香のするは之ならん歟。空場を取て嗅に。馥々とする。嗜甘美にをひなり。酒は一滴も非るに。斯遺香なり。酒か中に有し時は如何様も有んと賞せり。

（兒童よ學術に上達し徳行を爲べし芳名の後世まで流

六十

る、ぞ

○狼虚言を知ざる話

一夜狼餌を得んと里より出て徘徊

中○或家より小兒の泣聲をて其母が

叱れり○狼耳を聳て聞ば母「サア

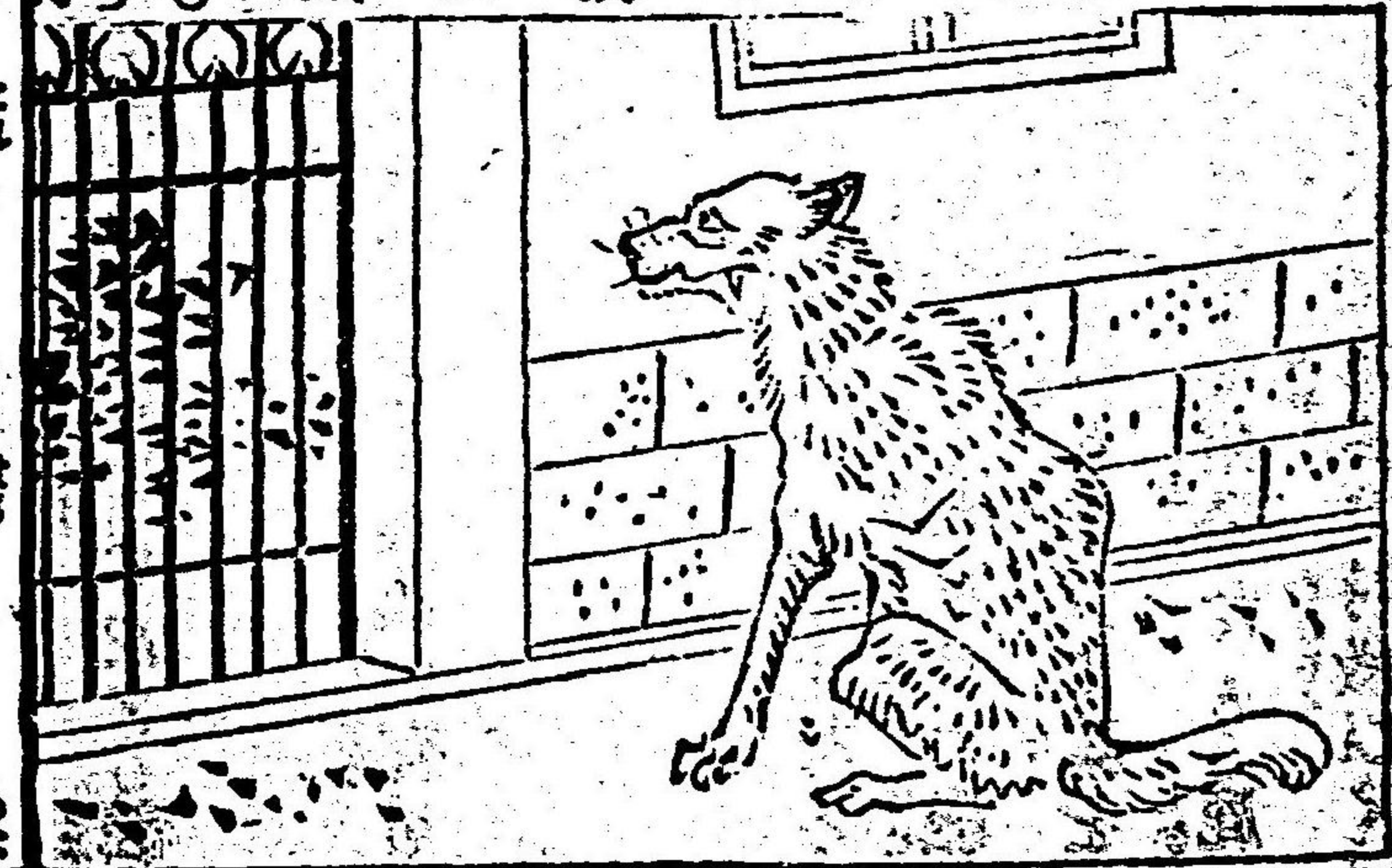
泣止んと狼に食せるよ」と云○狼

是は好食物に有つきたりと悦び

待り○頓て見り泣止み又母の聲を

て母「ア、好見じや○よく泣止だ○

昔のまの女が食ふとて来り○丁



ころきてやるぞ」と云を狼はき、て是はあてが外れたと○駭

詭ながら急ぎ去たり

(兒童よ人は大概口を言と思ふて居こと、表裏の有る

のあれば○由断すべからざ

○鹿恩を忘れて殺さる、話

或廣野にて鹿獵人に追駈られ危く成ば○傍らに茂り生たる

薄の中へ逃隠るを○獵人は氣付きて去て往過たり○折柄鹿の馳

て空腹まかば○薄の葉を食ひたり○此時獵人飯り來つて葉を

食音をき、て○鹿は此に隠るよと云て○矢を射込たり○鹿

矢に中り○苦さ息の下から○我は恩を忘れて危ふき時救ひく

れた薄さの葉を食しゆゑ此様め
よ遇たのかと漸やく気が付た
り

(兒童よ恩を受けて恩を忘る
と鹿の様なことが有ぞ

○農夫時計を失ふ話

或邑里の老夫。小僕兩人を召使て
農業を勉めの儉約暮に。何でも早
起は益が付と毎曉一番雞か啼と
起て小僕と預て呼覺す故。小僕は



愁さ事よ思ひ。畢竟彼雞めが早く啼ふ故なりと。一日兩人
合せて雄雞を縛殺し。知ぬ顔えて居ると。農夫は勿々由斷
せ。其晩から時計が無なつたから。寢忘ては成らぬと。毎曉
時を取違ては早く起さ。又月影の窓にうつるを。夜か明ま
思ひ。遅いぞ。寐過たぞと。夜中から噪ぎ起したり。

(兒童よ餘り狡猾に働さ過ると智慧まけをするぞ

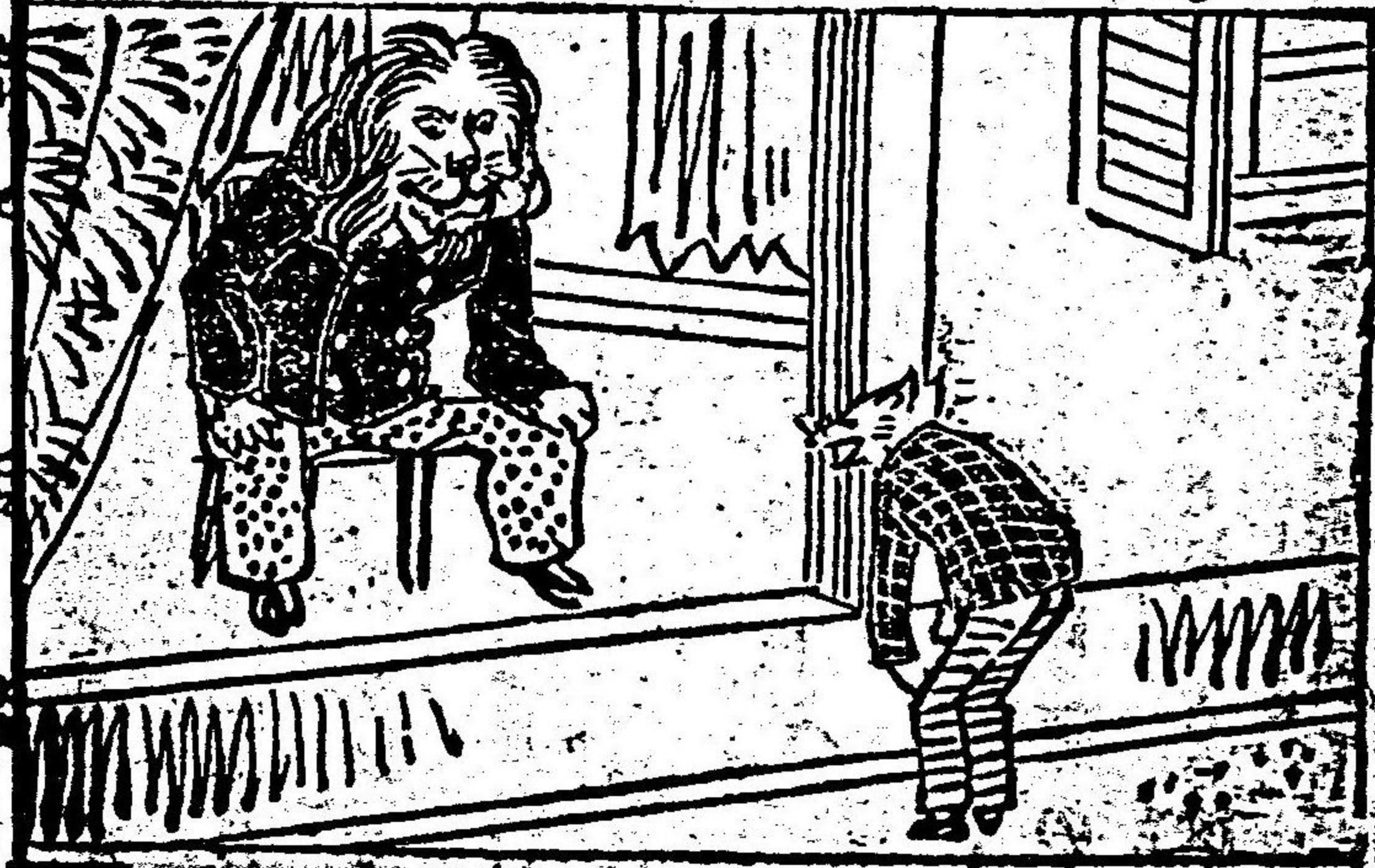
○運の神の話

運日の頃に。獨旅行の壯男歩み勞て。眠度なれば。路傍の土
堤に腰打かけ眠るに。もたれ居たる車匣。地に落。躰も側
田の中へ轉び墮んと爲と。一老翁忽然とあらはれ出て。壯

男を搖覺て「起よ〜」我の世に
 云運の神なり。汝眠りて水田に墮
 て傷でも付か。又荷物旅費を賊よ
 掠奪するると。不注意を云せし
 て。運が悪ひ〜と。我所爲の様
 云には困るからの注意よ〜。

○獅々王臭の臭を問ふ話

獅々王一時野羊を呼近づけ。近爾
 余息の臭さやと問ふ。野羊然様な
 りと云ふ。獅々王怒りて其首を食切



る。次に狼をよび。我口の臭は如何と問ふ。狼答へて佳に
 ひで御坐りますすと云。獅々王又怒りて詔諭者めと云て引渡
 り。次は又狐を呼て我臭は。如何を臭じやと問ふ。狐は畏
 て。愚臣は近頃冒寒で御坐りまして。絶と鼻がさ、ませぬ
 と答たり。

(兒童よ。狡猾の者の危い時に何とも云ぬものじや)

○剛臆の危難に臨とわかる

或武士遊獵せんと山中に行道よて樵夫と行遇。汝の狼の
 歩さし足痕は見ざるか。我おはかみを打取らんと欲へり。汝
 狼の居處を知らすと教然に問かけると。樵夫は腰を屈てキ

「ハイ、足あそばさば此にも見まする。貴君僕と相伴にいらして成
 三されば。狼の住どころ御見せ申ませう。ツイ彼山に有ます。○
 と云ふを武士は聞て顔色變へ。眞青に成て震ながら「臆夫
 は先有難い。狼の住處を聞おけば。何時來ても打取れば。今
 日は足痕を見とめて飯らふ。」

(兒童よ。危険に迫らぬ時には臆病者が勿々剛いぞ)
 ○栗鼠虫の美聲を感ぜる話

葡萄の棚へぶどうを奪食はんと栗鼠來りしが。其棚の下の
 草の中で。鈴蟲や松虫が。妙聲でうたふを聞つけ。我も彼や
 うな聲も成たいものと思ひ。栗鼠は棚より下で。鈴蟲まつ虫

と對ひ「君達はマア何を食なさ
 つて。其様な好聲で唱ひなさると
 問は。鈴むし松虫が答て「何も別
 に食物も有ません。只露ばかり啜
 て居ます」と云ふを聞て。栗鼠は
 其後露ばかり喋て居たれど。聲は
 よく成せして。飢て死したり。」

(兒童よ。飲食科。他人に薬と
 成品が。自分に毒と成が。あ
 り。必也他のものを欲が



り。他の事を羨むはあま、

○危急を助は論に及ぬ話

酷暑の頃、兒童一兩輩河に入て游居たりしが、不圖一人深き處に行て、浮沈みす。友の兒童助けんと欲する。力に及ばざり。兒童等皆一生懸命の聲を出きて、「助けて下され」と呼叫ぶ。折柄、小舟に掉さし、老父が來り、舟を止て、兒童に對ひ、「なせ此様を遊びを爲ぞ。深水へ行ば溺る、事の知れし事なり」と馬々と教示を爲に。兒童は堪へかね、又叫ひ出し、「オイ、老父、早く彼見を助けておくれ。教訓は後で聞から。」

(危急の際に臨んでは論よりも實行が肝要で有ます)

○狐獅子へ奉仕する話

或野に住し、狐獅子王に奉仕して。獅子の餌食と成獸を見出事を勉め。獅々は其獸を獲て、至極都合宜かり。志が漸々と狐慢心を生じ。獅子に媚諛ひ。直に獸を捕免許を請うけ。余も獅々も劣る者歟。と我威をふるひ。一日獨て狩に出

六十二
しが。他獸見て恐ぞ。て捕獲せ。狐怒つて兎を追巡るを。獵人に認



られて○ポント一打に殺され獲物にせられける○

(兒童よ自己分をまもれ○分を守れば身安く○守らざれば易からざ

ば易からざ

○驢馬の失錯の話

或邑里に住商人都府より出て何か下直の物を買入ると驢馬を引て出かけ○諸品の價格を聞に○下等の砂糖特別に廉價なれば是を求め驢馬の脊に附らる、丈砂糖の俵をつけて家より飯途中○川を渡る時驢馬石につまづき河中に倒れると○脊より附去砂糖は溶流れて○驢馬は不慮身輕に成て起上り○悦び立飯れと○商人は損をえて思々歎思ひ○其翌日又驢馬を引て都府に出て○其日は砂糖は止て○鹽

が下落ければ○是を多く買て驢馬の脊に負せ戻るに○驢馬の昨日より重くえて困乏が○昨日倒れし河を渡に○倒れば荷が軽く成らんかと思ひ○ぬざと倒れると又鹽は流れて身輕になり○驢馬は有難いと悦び勇み立飯りけるに○商人は二度も損をえて發憤○馬の惡癖直さねば成ぬと○又次の日驢馬を引て



九十二
 都府に出で、海綿を許多買て脊に負せ例の路を引かへるに。
 又川を渡る時、驢馬は此處じやと。川中へ倒れ。稍して起ん
 と爲に。海綿に水ふくんで大變重くあり。勿々起がたさを。
 引立られて。うめさながら家よつれ飯られたり。
 (兒童よ悪さたくみ爲ば。いつか我身に困ることが出
 来るものじや)

版權登録

修身教育新 第二編了

明治二十一年六月廿四日 印刷
 同 二十一年六月廿七日 出版届

(定價三錢)

版權所有

著作發行者兼

大阪府下東區本町四丁目十二番地
 日 置 岩 吉

印刷者

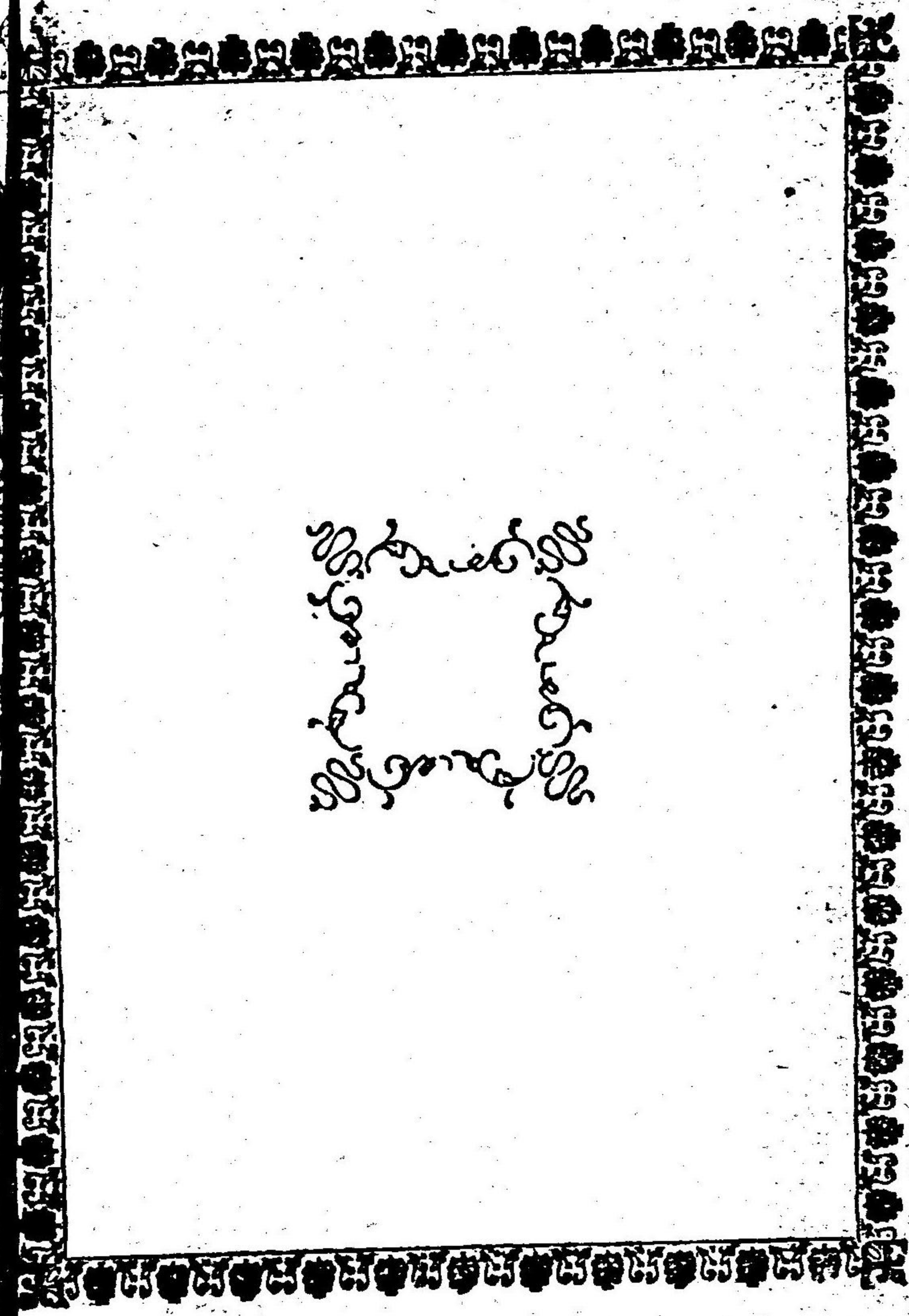
大阪府下東區備後町五丁目十三番地
 前 田 菊 松

發賣所

大阪府下東區本町四丁目
 赤 志 忠 雅 堂

同

各地書肆



小學生徒

修身教育嘵

二編 三編
忠雅堂發行



12356

小學修身教育話目録

生徒 直者益を得る話

鳥が馴る話

光暗の話

善氣洋燈大言を吐く話

老婆死神の遇ふ話

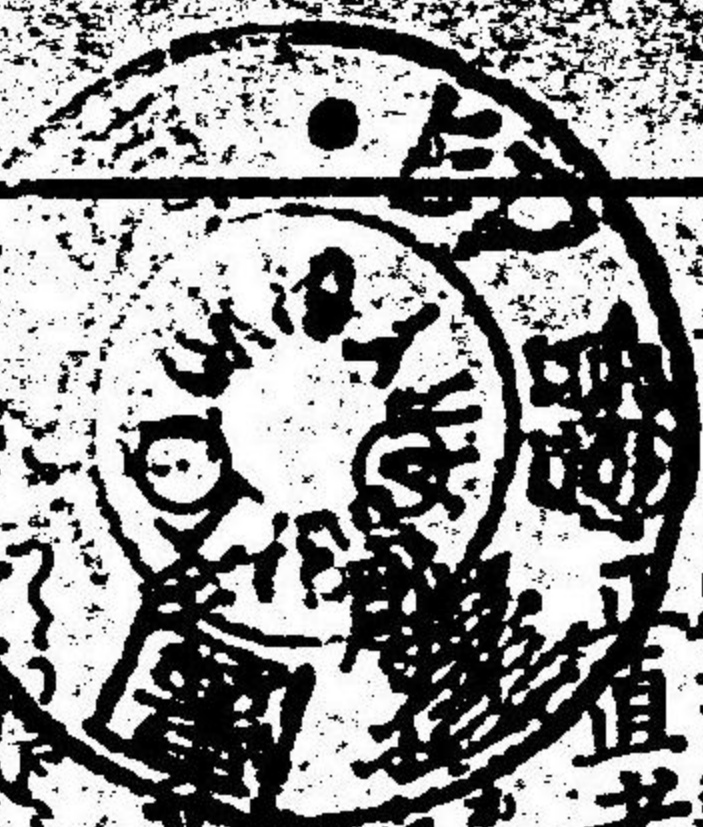
我怒れば他つじの話

蝙蝠會鳥言獸言憎る話

獸類の多少を論む話

兎危難の遇ふ話

善を施せば善報ある話



小學修身教育新

○正直者益を得る話

或里に正作と云ふ貧乏の農夫あり。天稟のつて正直者で能業を勉めて怠惰なく一日正作川端に往て芦を刈取ふ過て鎌を川へ落し驚愕直に水中を搜索と雖も鎌有されば正作の歎きと限り無し。此時河伯憐れて忽然と現れ神正作あり。汝が過失たる鎌は是ありや」と金の鎌を見せ玉ふ。正作黙頭て正否其れハ僕の鎌なら非」と答ふ。河伯は頓み水中に入り稍して銀の鎌を携へて現れ神正作と此鎌が汝の落物かと。正作見て正否其れふての非むと云河伯又水中入りて這回ハ鐵の鎌を持現れて神是が汝の尋ねる鎌かと見せ玉ふ。正作満面笑を合て正其其僕

のかまふあり」と喜悦神を敬ひ拜礼も神其正直を褒て鐵鎌ふ金銀の鎌を添へ與へたり。正作ハ有難と戴き黄昏不家み返り親き友み有しとと包まず譯を横造と云強慾成推夫が聽て我も往て益を得ん。翌日川をこみ至て斧にて木枝を伐容体して斧



を水中に投じ、川中へ入搜索て歎けり。捕らつて河伯現れ、神汝
何を歎ぞ」と問玉へ横造り。此ぞと意哀み悦び。横僕木を伐み
過失て斧を水中に落し候が搜索共斧か無生業の資を失ひし
故に歎き候と云へ。河伯聞て水中に入て頓て金の斧を持現
れ神「汝の斧は是成か」と問へ。横「其斧成」と云取らんと為れば。
神斧を隠て怒の声を發し。神「枉着者」と呵て水中に入て再
度現れし。横造り為方なく又水中へ投じ斧を搜索し知れど。
金銀の斧を得ざる取らむ。我斧迄失ひつばやきて飯たり。

(兒童よ人の正直が身の寶で有と邪曲な心を出せよ)

○我愁ければ他愁の話

二八人

或邑里に住牛度々積を虎に殺さる。牡牛大の憤怒て口惜く
思ひつゝか怨を散んと。竊に虎のすむ竹林を窺ひ一日牝
牡の虎竹林に在せり。虎見二頭熟眠まじ。牡牛悦び勇みて。
直ち角以て二頭の虎兒を突殺して逃飯けり。稍して牡虎
竹林に飯して虎兒の死を見て愕然仰天。大聲を發て怒り
慟哭を遙ふ。此方から野羊が見て。汝虎兒を殺されて涙哭
が汝を兒を知られて愁歎で居もの。幾等有か知れぬせ。

(兒童よ我身捨つて他の痛さを知れよ)

○鷗鳥が馴る話

里に生れて長トなる鳥大鷗の勇威有て鳥獸を捕食ふ事



平日お大ど懼れ
 たり然るお其鳥山お移
 り住一が一日大驚と宵
 きて遇ひ鳥に恐れおのき。
 雲霞と後も見ず飛去
 たり。其後お又鳥の大驚
 と行遇お恐たる容をか
 し逃去ぎて居れり。其
 後の遇度お怖れる事失
 て一樹おとまり。又近寄

二八八

てカ「雕君如何。何か御同遊致ませう」欵「杯云梯お馴カ敷成た
り。

(児童は恐敷おもひ者も馴染ば怖く無様ふあるが心やす
 だての輕蔑を生むれば慎めよ

○蝙蝠禽鳥音歌よび恐まるる話

或汚穢洞穴の中お一族群居蝙蝠あり一時其地おまも丹頂の鶴
 撲擧されし禽鳥の大統領と成り諸鳥鶴の集み集て賀も平日は夜
 中俱お騒ぐ梟のみのりふ此事を告げ鶴を賀も可と云は蝙蝠の
 長たる者の云ふ「我等肉翼有とも身体ハ鼠の如く鳥の類お悲
 と答ふ又同頃お獅々其山お來つて住大お威をうつる百獸よお恐て

直ちも傍に住き其属下と
 成狐是を蝙蝠小告て御々
 不属すも鼠も肉翼有獸
 類ハ非と答ハ狐ハ黙去
 其後鶴と獅々との間ハ
 戦争有一時蝙蝠にさうら
 の味方共あらすして勝色
 の見ゆ。方ハ加り一が
 鳥獸和睦の後ハ鳥類獸
 共ハ蝙蝠の二心ある舉動



を深く悪みて。双方共社會に入むる竟ハ洞穴を追出たりと。
 (兒童よ義も信も無し心も定まらば。彼是も身を倚
 る者ハ他ハ憎れてつましぬ者ハ成そ

○手元くらりの話

或豪農夫の老婆頗る喧口。他の非をあらざる性。毎日常疾
 く起て臺所ハ坐一家婢小僕等を叱り使ふ。日老婆ハ例の如く臺所
 へ出で煙草を喫煙する。竈の下を焚家婢不使揮りて。煙
 レ阿村ソウ薪をくべてハ費ハ多ハ一本ハまへ。燃出と火の要慎
 が悪いと叱るを庭の隅で草鞋をつくり居る下僕が聞。又老婆
 が喧しく云ふ。と見れば老婆煙草の吸殻の落て蒲團が焦るも

氣付ぢ又庭を掃小僕
 を叱る下僕ハ蒲團の焦
 るを知らざどて。見
 てハ草鞋をつくるハ老婆
 焦臭が臭中入り見れを
 蒲團が焼れん周章て。
 掃消を下僕ハ可笑思ハ
 後で草鞋を見るハ乳
 を附忘さう。紐の長短の
 物を造りたり。



一八八

(兒童ハ他の事と兩匹云て我ハ事ハ心をつけぬを手元
 くら〜と云ぞ

○山獸一類の多少を論む話

山中ハすむ獸一時集會て其一類の多きを互ひみ誇つて争ヒ
 ぶ竟ハ眷族の多きハ先様を誇りて族ハ大のふ誇るハ狐鹿等様を
 憎み云ふ様君ハ如何も此山中ハ於ハ一類多く他ハ比るハ有まじ併し
 今日集會ハ獅々來りて其群獸獅々の洞ハ行ま眷族多少此
 へんハ如何と云ハ他の獸も然りと云鬼鹿狐ハ同ト群獸打つれだち
 て。獅々の洞ハ至るハ此獅々ハ兎獅々洞ハ在て群獸の群をきく。
 牡獅々ハ怒ハ目を怒りて腹を張りハ声荒らげて我等ハ牡兎兎而

日有しと百載我春族も同様者有すよと感ふれば群衆も退かぬ。
(児童も賤き者や、教方の一類が幾寺多し有て、成勢強き者も勝てし出来ぬ也。)

○空氣洋燈大言を吐く話

近來専ら流行空氣洋燈が光の能輝くを自負して他の玻璃燈
も「ナント」已の光輝ハ格別な者で有るの汝等が幾寺石油を喫
て照しを懸て費つても及ぶ事て無い先己と同様み光ハ太陽か
大陰で有るか」と頻り大言を吐て居る折柄其家の戸主が小
僕を呼且「徳藏よ今晚の要も無から。大洋燈ハ消てあり」と云はば
僕「ハイ」と應へて空氣洋燈を消し他の玻璃燈々笑ひ下ら「空君

大陽や大陰の光輝ハ人カで消
ませんぜ。

(児童も考へおく。自慢を為
たし大言を吐くものも無ぞ)

○鬼危難も遇ふ話

一頭のうさぎ。狐も追かけられ一
生懸命逃して茂る草の中へ隠
れて狐も食ら難く免れ「お狼
お又のそ」と歩み来れば是ハ
たまたまと鬼ハ又馳て木陰へ逃



込られん。虎が眠て居るか。是は驚き谷へ駈下れば。洞窟が有
て。獅々の住處で無か。とのどき見るふ然で無ければ悦んで
洞へ隠て息を継と後ろわら。蝮蝎が首を延て食ひ付より

(児童よ危難の重あると免れんと為ふ。注意をせね
ば成ませんぞ)

○老婆死神のあふ話

兎角江湖の愚痴を老人の貧困に迫る者あて「死」と云
ものどやが之の無論虚で有ます。或は邑里で貧く暮る老婆が。
秣を刈て賣んと。刈取て負擔て黄昏お戻る。草が重て歩
疲勞途中で草を下し憩み「噫此様お老く辛苦のを為す。何

二へん

二へん

の因果が死の方がま。一や嗚死た。と獨言あつてや。と目前へ
死かみがぬつくり立て姿さん死く。来ふさい」と手を捕へば。
老婆の愕然して。其手を拂ひのけ「噫今のこと有ません
御免あさい」と云急ぎ草を負擔て逃返りたりと。

(児童よ死の杯の事。決して云ぬがよい)

○善を施せる善報の話

蜂一疋樹下湧出る清水を來り水を飲んと為ふ湧出る勢ひ
烈し。蜂水不瀦れ浮沈して甚く苦む時木枝を憩
む雀これを見て氣毒と思ひ木葉一枚啄て清泉の中へ落し。
早く其葉を取付ふさい」と云。蜂は怡悦葉も取り清泉の外へ

十五

出危難とのかれたり。此時何處からか鳥刺来つて雀と糞掉ふて刺と
 らんとせ。蜂は是を見て今危難を助けられ。恩を報せんと鳥刺の足
 を強く刺せば痛ふ堪ず。持
 たる糞掉を地ふ落したり。其
 間雀も蜂も逃去しつり。と。

(兒童よ他の危険を助
 けん彼まじ己危きを救
 ふこと有るべし)

小學修身教育漸終



明治廿一年九月廿七日期成 版權所有 大阪東區本町甲丁目土蔵地 著者 日置山石吉

小學修身教育漸

- 面貌より才の話
- 狐兎鬼を追ふ話
- 妖怪は無りの話
- 猛者が怖と有る話
- 鳥かみのめを羨む話
- 狸化て笑はる話
- 一心定らねば修身らざる話
- 飾りより實用の話
- 影と楯で實を失ふ話
- 蜻蛉水馬と軽蔑る話
- 柳の樹皮を枯らす話
- 燈臺もと暗の話
- 思慮なく恐るる話
- 响る車の話

小學修身教育漸

○面貌よりハオの話

或鳥鋪の處頭ハ鴨哥と鴨鴨と列ハおまきハ鴨哥羽の美麗さを
あつむく。自負して競ひ止まじき竟や庭に居る雞を呼んで何れの羽が
美麗きやと問ハハ孰も羽の美麗ひをかく鴨さんハ眞似がてますか。

(兒童よ面貌美くても才藝が無くハ負けるぞ)

○飾りより實用の話

極暑の候一頭の牡鹿水と谷の流ルハ飲み己の容貌うつろを見て
獅々の虎ハ我輩の社會で他ハ勝れハ猛獸で有れど己の如立派
ハ大堅固ハ角ハありどと自負も又足を見て「我足の瘦く弱

21

009944-000-0

特64-212

修身教育嚟(小学生徒) 1-3編

日置 岩吉/著

M21

AAE-1086



特

2